



第 131 号

—平成29年 3月20日発行—

公益財団法人 古代学協会だより

三笠宮崇仁親王殿下の薨去

公益財団法人古代学協会名誉

顧問・三笠宮崇仁親王殿下（大正天皇第四皇男子）は、平成二十八年（二〇一六）十月二十七日、東京の聖路加病院で薨去された。

殿下は戦前には当時の皇族の義務に従って軍籍に入ったが、戦後には戦争への反省から歴史を学ぶことを決意し、東京大学文学部の研究生となった。最

初の関心はヨーロッパの宗教改革であったというが、やがて殿下の研究は時代を遡り、西洋文明の起点ともいえるべき古代オリエント史に行き着いたのである。その後の日本における古代オリエント史研究の隆盛は、殿下の尽力の賜物であったといっても過言ではない。

殿下は早くから当協会の創



古代学協会 50周年祝賀会における殿下

設者である角田文衛博士と親交を持たれ、角田博士が企画された協会の諸事業の遂行に協力を惜しまれなかった。昭和三十四年（一九五九）に当協会が平安宮大極殿跡の発掘調査を行った際には発掘現場を視察されたし、昭和四十三年（一九六八）の平安博物館の開館にあたっては百



平安博物館開館式（左は百合子妃殿下）

合子妃殿下とともに式典に臨席されて協会の未来を言祝がれた。そして、平成三年（一九九一）には協会の名誉顧問に就任されたのである。

殿下は大正四年（一九一五）十二月二日生まれであるから、その生涯は百年という永きにわたった。戦後の新しい皇室のありかたの方向づけについても、日本における古代オリエント史研究の発展においても、殿下が果たされてきた役割は計り知れないほど大きい。ありし日の殿下の温顔を思い出しつつ、殿下のご冥福を心から祈りたいと思う。

（同志社女子大学教授 山田邦和

当協会参与）

「三笠宮崇仁親王殿下を偲ぶ」 記念号にあたり

公益財団法人古代学協会理事長 大坪孝雄

三笠宮崇仁親王殿下には昨年平成二十八年十月二十七日に満百歳のご長寿を全うされて薨去されました。謹んでお悔やみを申し上げますとともに、ご冥福をお祈り申し上げます。

歿葬の儀は十一月七日に東京豊島岡墓地において、喪主百合子妃殿下、皇族の方々、安倍首相はじめ三権の長、最高裁判所判事、諸外国大使館の方々、三笠宮崇仁親王殿下とご親交のあった多くの方々のご列席の下、簡素な中にも厳かに執り行われました。

古代学協会を代表して私も列席いたし、宮様をお送りして参りましたことをご報告申し上げます。

三笠宮崇仁親王殿下が古代オリエント史の分野の世界的な研究者であられたことは、夙に知られているところであります。

同時に宮様は、当古代学協会の創立者であり、理事長であった角田文衛博士とご親交が深く、当協会の諸事業にご視察のため、京都をたびたび訪ねられました。一九五九年（昭和三十四）には第一回公開講演会に御臨席。その数日後、平安宮大極殿跡の第一次発掘調査現場をご見学、出土遺物を確認され、さらに一九七六

学者としての宮様

元宮内庁正倉院事務所長 米田雄介

三笠宮崇仁親王殿下は古代オリエント学者として数々の業績を挙げてられたことはよく知られている。たとえば、私の手許には、『古代オリエント史と私』（学生社）ほか数冊があるが、宮様の著作は訳書も加えると十指を超える。それらの著作について語る資格は無いが、私なりに殿下の学者としての一面を紹介して、殿下を偲ぶよすがにしたい。

初めて宮様の近くに侍ったのは偶然のことであった。まだ私が大学院の学生時代に友人と東京の歴史学研究会の大会に出席したときである。私どものすぐ前の席に座っておられたのが、『倭の五王』ほか、多くのベストセラー作品を刊行しておられた藤間生大氏であった。私どもは氏の著作を仲間内の合評会で取り上げていたから、直接お話をしたことはないが、写真で見慣れていたのが、高名な学者として存じ上げていた。しかしそのお隣で、親しくお話をされていた方がどなたなのか存じ上げることが無かった。

ところが大会のメイン報告が終わり、討論に移って暫くすると、司会者から、「みやさま如何ですか」と問いかけがあった。少し間を置いて私のすぐ前に着しておられた「みやさま」が、まだ朝が早いこともあって、といっても通常の勤務時間よりは遅かったが、お一人であった。殿下は都内の大学に出講のときも、お一人で電車に乗られると聞いていたから、お一人で来られても不思議ではなかった。

やがて女性の秘書の方が来られたので、殿下にお知らせしようかと申したら、勝手知ったる書陵部の中とのことで、殿下にお知らせしなかつた。なお、その時までにはキチンとズボンとワイシャツを着用していた事はいうまでも無い。

その後、殿下とは廊下で何度も目に掛かったが、ばつの悪さは何時までも残っていた。それから十数年後のある時、秘書の方が、仕事が一段落付いたら来てもらえないかと、殿下が仰っておられると、私を呼びに来られた。一段落も何も、直ちに殿下の部屋をお訪ねしたところ、横文字の書物がびっしりと並べられた書架の間から、どうぞと声がして、本の隙間の僅かな空間に置かれた机に向かって殿下が座っておられ、その横の席を勧められた。普通は直立不動であるべきかも知れないが、殿下と私、それに茶を淹れてくれた秘書の三人という気軽さもあって、厚かましくも殿下の横の席に着した。

「みやさま」と呼ばれた方が立ち上がり、「自分の専門では無いから」と断つたうえで、しかし少し発言されたあと着席し、隣の藤間氏と何か話をされていた。このときまだ私などは「みやさま」が誰かは判っていないが、大会終了後、東京の友人と大会中の話をしている内に、「みやさま」が三笠宮様であることが分かり、文字通りビックリボンであった。近くに侍りながら、お辞儀の一つもしないで失礼してしまつた。

この時の司会者が「中世的世界の形成」の著者石母田正先生であることは、大会当日の案内で判っていたが、氏が討論終了後に殿下のところに来られて、挨拶をされておられたことも印象的であった。お陰で、石母田先生とも警戒に接するほどの位置でお目に掛かったことになる。その日は、大会の内容よりも、宮様や古代史学界を代表する両先生にお目に掛かった、いや近くに侍ることができたこと、しばらくは興奮冷めやらぬものがあつた。

石母田・藤間両先生は、戦後のマルクス主義に基づく歴史理論を構築する研究者としてよく知られていた。それだけに宮様との取り合わせは、後で考えると不思議な気もする

が、殿下はそのようなことは一向意に解する風はなく、両先生とフランクに話されており、学問に対する姿勢を教わった気がする。少なくとも宮様の周囲には「菊のカーテン」はなかつたように思う。後に殿下は紀元節の問題が生じたとき、その問題の取り上げ方が学問的根拠に欠けるとして批判的な意見を述べられたことから、殿下を「赤い宮様」と揶揄した人もいるが、歴史学者としての宮様としては、学問的に証明できないことを、そのまま信用することは間違いであると思われていたからである。このように殿下のお気持ちや付度するのは、私自身が苦い経験をしたからである。後に取り上げる。それから数年後に縁があつて私は宮内庁書陵部に勤務することになった。その勤務先は皇居の東御苑と呼ばれる一画で、江戸時代の大奥の所在地であった。現在の書陵部の建物は二代目で、初代の建物は三階建て、その三階に殿下の研究室が置かれていた。殿下はご公務の合間に、よく研究室でお仕事をされていたが、書陵部庁舎の老朽化が進んだために改築することとなり、殿下の研究室は東京都三鷹市の中近東文化センターに移られた。苦い経験とは、殿下の研究室がまだ書陵部にあつたときのことである。

建て替え前の書陵部には当直制

度があつて、私も月に一、二度は当直をしていたが、休日前夜の当直は、翌日、交替の人以外は滅多に人は来ないから、ゆつくりと休んでいた。それに書陵部の周辺は、昼夜を問わず皇宮護衛官が巡回しているので、当直しても鍵をかける必要は無いが、万一ということもあるから、建前上は施錠することになっていた。しかし昼頃まで寝ていると、もし職員が来ても入ることが出来ないとい困るので、扉は閉めるが施錠しないことにしていた。

ある当直の日の朝、重い扉の開く音で目を覚まし、やがて玄関から声が聞こえたような気がした。寝込みを襲われた感じもあつたので、懐中電灯を掴んで廊下に飛び出したところ、そこに立っておられたのが殿下である。そこはすぐに気付いたが、起き抜けの私は上着どころか、ズボンも穿いていないステテコ姿であつたから、殿下も驚かれたに違いない。「やあ」と声をかけられ、「暫く部屋に居るから、誰かがきたら教えて下さい」といわれて研究室に向かわれた。「失礼しました」と申し上げたものの、バツの悪さは如何とも出来ない。もつとも殿下は、書陵部の職員と昼休みに卓球をしていた時期もあるから、ステテコぐらいでは驚かれることは無かつたと思うが。

殿下は、普段は秘書の方を伴つて

古代オリエント史学者・三笠宮崇仁親王

金沢大学名誉教授 佐々木達夫

古代オリエント史を研究された三笠宮親王は、多忙な公務の合間に研究や教育に携わり、オリエント学会や中近東文化センターの設立に尽力され、古代オリエントの歴史に関する著書や論文を著された。

古代オリエント史を研究したのは、陸軍軍人として体験した戦争への思



古代学協会 50 周年祝賀会にて

いからであった。終戦時は二九歳。「過去のあらゆるものに失望し、信頼をなくしていた私は、何から何までもすべてを新しいものの中から探してみよう」と決心した。一九五〇年代後半に歴史学者として紀元節の復活に反対し、「二月十一日という祝日とするのは間違い」「神武天皇の即位は神話であり史実ではない」と発言した。「軍は歴史の研究が不十分だったのではないか」との思いから、西欧史そして古代オリエント史の研究を志し、一九四七年四月から三年間、東京帝国大学文学部研究生となられ、ヘブライ史・古代オリエント史を専攻した。ヨーロッパの宗教改革、原始キリスト教、ヘブライ史、オリエント史へと殿下の研究は進展し、ヘブライ語で原典としての旧約聖書を読まれるほどであった。

され、その後名誉会長として学会を支えられた。著書『古代オリエント史と私』（学生社一九八四年）の印税を学会に寄附され、その基金で三笠宮オリエント学術賞が運営されている。

一九五五年から東京女子大の講師となり、近くの喫茶店へ受講の学生達をお連れになることがあった。学食でお昼を召し上がり、時には駅からのバスで学生とお喋りなさるなど、親しみやすい先生であったと聞く。

青山学院大、専修大、天理大、拓殖大でも講義された。

日本で開催された国際学会で開会挨拶されるなど学会出席も多く、フランス学士院博文芸アカデミーの外国人会員やロンドン大学東洋アフリカ研究学院の名譽会員に推挙されている。トルコ政府からはアタチュルク国際平和賞を贈られた。

一九七九年に中近東の歴史文化を研究する施設として、出光佐三氏の協力で中近東文化センターを設立し、総裁に就かれた。岡山市立オリエント美術館や古代学協会の名誉顧問もそうした活動の一つであり、古代学協会の角田文衛先生とも親しかった。

研究者として中近東の遺跡を何度も訪れ、資料や原典にあたって地道に研究され、その成果は『帝王と墓と民衆—オリエントのあけほの』光文社一九五六、『乾燥の国—イ

ラン・イラクの旅』平凡社一九五七、『大世界史—ここに歴史はじまる』文藝春秋一九六七、『生活の世界歴史—古代オリエントの生活』河出書房新社一九七六、『古代オリエント史と私』学生社一九八四、『古代エジプトの神々—その誕生と発展』日本放送出版協会一九八八、『文明のあけほの—古代オリエントの世界』集英社二〇〇二、『わが歴史研究の七十年』学生社二〇〇八という著書となった。

訳書として『古代文化の光—ユダヤ教とキリスト教の考古学的背景』岩波書店一九五五、『聖書年代学』岩波書店一九六七、『考古学から見た古代オリエント史』岩波書店一九八三がある。編・監修として『日本のあけほの—建国と紀元をめぐって』光文社一九五九、『世界の文化史蹟 第二巻 オリエントの廃墟』講談社一九六八、『歴史清談 古代オリエント／中国日本東北』河北新報社一九八七、『古代メソポタミアの神々—世界最古の「王と神の饗宴」』集英社二〇〇〇がある。記念論集には『オリエント学論集 三笠宮殿下還暦記念』講談社一九七五、『オリエント学論集 三笠宮殿下古稀記念』小学館一九八五、『三笠宮殿下米壽記念論集』刀水書房二〇〇四がある。

(当協合理事)

三笠宮崇仁親王殿下と古代学協会

西井芳子

三笠宮崇仁親王殿下と古代学協会の関係は、協会創設者である故角田文衛博士（平成二十年五月逝去）と歴史学、特に古代史研究者としての親交に始まる。

二歳年長の角田先生は、昭和十二年（一九三七）に京都帝国大学史学科卒業後二年目にして、文部省日伊交換学生として約三か年間ヨーロッパへ留学。昭和十九年（一九四四）の七月、三十一歳で召集されて満洲へ渡られたが、その時既に広い視野での古代史学者であった。

殿下については、昭和十六年（一九四一）に陸軍大学校を卒業、その後支那派遣軍司令部参謀として南京への駐在を経て、終戦を迎えられた。その二年後の昭和二十二年（一九四七）四月から三か年間、東京帝国大学文学部の研究生となられて西アジア史の研究者としてのスタートを切られている。

角田先生は、終戦と同時に捕虜としてシベリヤに抑留され、帰国は三年後の昭和二十三年（一九四八）の七月であった。京都大学に一時席を置かれたが、その後大谷大学や同志社大学等を経た後、大阪市立大学助教授、教授としての道を歩まれた。この過程で意図するところあり、復

員後三年目にして同学の士と共に古代学協会を創設（昭和二十六年十月）され、研究誌『古代学』（季刊）を発刊した。

西アジア史、特に古代オリエント史の研究者としての道に進まれた殿下と角田先生との交流がいつ頃から始まったのか最早知るすべがないが、『古代学』の第三巻第二号（昭和二十九年（一九五四）六月発行）中の『西方亜細亜古代学界の展望（3）』に、殿下の論考「ムラバート洞窟出土のヘブライ語文献について」が掲載されている。

これを機会に角田先生の遺贈資料をあらためて見直したところ、この寄稿依頼を受けた直後と思われる殿下からの自筆書簡（承諾、内容確認、脱稿、校正、抜刷礼状など）の封書三通、葉書四通が保管されていた。その期間は昭和二十八年（一九五三）九月から翌年の八月十九日までの凡そ一か年間に亘るものである。これら角田先生との手紙のやりとりから推して、殿下との研究を通じた親交は、昭和二十八年から始まったのではないかと考えられる。右のような過程を経て、その後古代学協会の諸行事への御臨席が実現し、延いては平成三年度（一九九



三笠宮様とともに（当協会 50 周年記念式典）

一）から薨去されるまでの間は、名誉顧問として協会の研究事業への御協力をいただいた。

この間の殿下の御来臨記録については、本誌の末尾を参照願いたい。なお補足ながら、古代学協会との関係外ではあるが、角田先生との交流から伺える当時の研究史の一端として、殿下自筆の書簡（賀状は除く）などを紹介しておく。

その内容の（一）は、日本初で計画された『西アジア方面考古学的調査団派遣計画』の実現直前における「日本オリエント学会創立を目的とする第一回打合せ会合（昭和二十九年四月十日）」開催通知の自筆葉書一通であり、その（二）は、殿下と後援者候補の朝日新聞社・笠信太郎氏との連名による会合開催正式通知の封書一通である。

更に、この会合後の日付（五月）

での殿下自筆のかなり詳しい封書がある。その内容は、関係者らとの検討結果として、イラクとの外交問題、外貨獲得の困難さ、調査隊員の準備調査の不十分さ、等々から推して、調査の実施を昭和三十年度へ延期するとの結論となった旨の角田先生への報告である。

この後における他の研究者から角田先生宛の書簡などによって知る限り、この調査は角田先生の発案によって浮上し、江上波夫先生を団長、自らは副団長として計画され、資金面では朝日新聞社の協力を求め、一方で、これを機会として（財）日本オリエント学会（会長は殿下）を発足させた（昭和二十九年七月一日）ことである。しかし、その後の結果として、調査はオリエント学会主催では文部省の補助金が下りず、殿下と江上先生の御努力でもって東京大学の主催となり、調査対象国をイラク、イランとし、朝日新聞社後援での十年計画でもって実現した。その記念すべき日は昭和三十一年（一九五六）十月八日であり、殿下は特別参加としてイラクのサラサート遺跡において参入式を行われている。

ただ非常に残念であったのは、副団長の角田先生は、本務の大阪市立大学との関係から調査への参加ができなかったことである。

(当協会参与・元常務理事)

三笠宮崇仁親王殿下 御祝辞

― 古代学協会会長・理事長就任披露宴において ―

古代学協会が、再発足と申しますか新発足と申しますか、新しい人材と組織をもって、これから大いに輝かしい未来に向かってその第一歩を踏み出される今夜の会合にお招き頂きまして、ほんとうに嬉しく思います。またこれまで御準備になりました皆様の御努力に対して、心から敬意を表したいと思います。

来賓の祝辞で、むずかしいことを言いだすのはよくないと思いますが、何分にも私は古代史を専攻しており、古代学とは大変関係が深いので、祝辞の範囲を逸脱するかもしれませんが

が、その点お許しを頂きたいと存じます。

実は私自身、戦後ずっと今日まで古代のオリエント（中近東）史を研究しておりますので、先程の角田理事長の御挨拶の際に、先生が今お考えになっている古代学の内容を伺いたかったのですが、今日の会で御説明頂く時間はなかつたろうと思いません。

古代学協会のことを回覧いたしましたすと、あれは昭和三十年代だったと思いますが、角田先生とたしか大阪商工会議所の杉道助会頭と、大阪



のつるやかどこかの一室で、古代学協会のことについてお話を伺った記憶があります。その後、大変な御努力で平安博物館を運営され、そこでもいろいろなことを教えて頂きましたし、またエジプトのアコリスの発掘報告書でも勉強させて頂きました。そうかと思うと、



は、日本古代史とか、中国古代史とか、西洋古代史とか、それぞれの狭い枠の中での研究しか考えられなかったと思います。そういう所に古代学という言葉が出てまいりまして、なかなか受け入れられなかつたに違いありません。

最近における人類学の進

紫式部についての御著書で、角田先生の別の一面を拝見することができました。さて、古代とは一体何か、あるいは古代はいつからいつまでをさすのか、これはもう歴史学界で世界の学者たちの間での大問題でありました。従来、歴史時代、それ以前が先史時代、もっと前は原始時代といわれてきました。そうした原始とか先史とかいう言葉については、角田先生の論文がございますので、私はいつもそれを利用して頂いております。おそらく古代学協会が設立された三十数年前の我が国の歴史学界で

歩はいちじるしく、直立二足歩行の人類（ヒト）出現の時期が、三十年位前には二百万年前といわれましたのが、十年ごとに百万年ずつさかのぼり、今では五百万年前、学者によつては六百万年前ともいうようになりました。これはアフリカのオルドバイ渓谷での化石人骨の研究により、人類進化の様相が継的に証明されたからであります。私も人類出現の時からが人類の歴史だと思いません。五万年ほど前からは、人類も現在の我々と全く同じ進化の段階に達した新人（学名：ホモ・サピエンス・サピエンス）となりました。そして

彼らがつくった小さな女性像は、西はヨーロッパから東は、シベリアにわたって発見されております。

そもそも歴史時代と先史時代が分けられたこと、つまり文字資料の有無で時代区分がきめられたのはドイツ式ではなかつたかと思えます。たとえば、ドイツの考古学者は文字資料が出土しないと年代決定に消極的ですが、アメリカの考古学者はその他の遺物だけで大胆に年代を推定してしまう傾向があります。

また文明の定義の中に、文字の存在を入れている学者がいますが、南米のインカ帝国は文字を持たず、キープと呼ばれる縄の結び方で



左から：三笠宮殿下、(財)古代学協会 色部義明会長（当時）、同協会 角田文衛理事長（当時）

いろいろな事件を示したわけですが。それでもインカ帝国を先史時代とはいえないし、インカ文明と呼んでさしつかえないと思えます。それからよく原始時代とか、原始芸術とかいわれますが、今から一万五千年ないし二万年前のヨーロッパで作られた動物の彫刻や、洞窟壁画―フランスのラスコーやスペインのアルタミラなど、とくに有名―のときは、おそらく現代の芸術家でもなかなか真似のできない生き生きとしたすばらしいものであり、原始芸術という、なんだか幼稚さを思わせる用語の使用には疑問を感じます。それやこれや考えますと、歴史学の

の範囲をアルファベットの「T」で表わすことにいたしました。すなわち、上の横棒左端（地図では西端）はバルカン半島で、アナトリア（今日のトルコ領）からメソポタミア北部・イラン高原を経て、東端はインドス地方（今日のパキスタン）になります。T字の縦棒は、シリア・パレスティナ地方からナイル川流域地方にあたります。いろいろなことを申しましたが、これからの研究はどうしても角田先生が以前から提唱されておりました地球全体を舞台とした古代学によらねばならないと思えます。日本の歴史学者の考えも今ではずいぶん変わってきておりますから、古代学協会の活動も三十年前よりは有利な環境になったはずであります。最後に、この頃さかんに二十世紀のことが話題になります。私はそのためにはどうしても五百万年間の人類の歴史を正確に把握することが肝要と存じます。「過去を知って、はじめて未来を測り得る」のであります。お酒を飲んだわけではありませんが、長々としゃべりすぎましたので、誠に申し訳ございませんでした。間違つた事を申し上げましたら、角田先生からお教え頂きたいと存じます。改めて、古代学協会の再発足を祝し御発展をお祈りいたします。おめでとございます。

一九九〇年（平成二）京都全日空ホテル「平安の間」において色部義昭会長、角田文衛理事長就任披露祝賀会が開催されました。昭和四十二年の開館以来、約二十年の歳月を経た協会経営の平安博物館は、一九八六年（昭和六十一）四月、京都府に移管しました。新博物館は、京都府文化博物館として一九八八年（昭和六十三）十月一日に開館。一方、当協会は本来の研究事業を遂行するため、組織の再編成を行ない、同年九月一日、古代学研究所を発足させました。しかし改組中の研究所ならびに協会は、はからずも研究活動において低迷をたどりました。一九九〇年（平成二）四月一日、協会の会長、理事長が交替するにあたり、研究所も漸く体制が整備され、新たな段階を迎えました。そこで再出発の決意をこめて広く研究所の事業を紹介し、併せて代表役員の就任を披露するための小宴を、三笠宮崇仁殿下、同妃殿下ご臨席の下、開催しました。本稿は、そのおり三笠宮殿下より賜った御祝辞です。

三笠宮崇仁親王殿下の御来臨記録

◇一九五九年（昭和34）十月三十一日

古代学協会第一回公開講演会
平安宮大極殿跡発掘調査出土遺物展
示（見学、並びに）会食。



◇一九五九年（昭和34）十一月四日

平安宮大極殿跡第二次発掘調査現場（上京区千本九太町西北・内野児童公園）



◇一九六八年（昭和43）五月十二日

平安博物館開館式
百合子妃殿下ご同行。式典・テープカット、並びに）会食。



◇一九七六年（昭和51）四月二日

平安京東洞院大路跡第二次発掘調査（中京郵便局改修工事敷地内）
百合子妃殿下ご同行。



◇一九八二年（昭和57）十二月十一日

平安博物館開設十五周年記念学術公開講演会
講演「オリエント美術随想」



◇一九九〇年（平成2）六月十六日

財古代学協会会長、理事長就任披露
来賓祝辞、並びに、百合子妃殿下ご同行にて会食



◇二〇〇一年（平成13）十二月八日

古代学協会創立五十周年記念学術公開講演会
講演「古代オリエントのデザインにおける「対称性」について」



発行者 公益財団法人 古代学協会
604-8131 京都市中京区三条通高倉西入ル
604 菱屋町四八
電話〇七五―二五二―三〇〇〇
発行日 平成二十九年三月二十日
印刷 明文舎印刷株式会社
601-8316 京都市南区吉祥院池ノ内町一〇
電話〇七五―六八一―二七四一